

口 差 点

こうさてん

…つるぎを捨てよ じつじつとく いくさ
を捨てよ とことわに 平和をまもれ 地
の極みまで 平和をまもれ 世々の未まで
…ひろく歌われている「長崎の鐘」の他
に、これは永井隆博士自身が書きのこし
た、もう一つの長詩「長崎の鐘」です。

鐘」を朗読と音楽で、原爆忌に先立ち、初
演のコンサートが行われます。長崎と松本
をつないだ友情の共作版画「原子野の花」
(永井博士の原画で加藤大道の彫り)が常
設展示されている、ゆかりある会場から第
一步の発信です。

70年前、世界で初めて原爆が投下された

昨年9月、「原子野の花」が展示された

広島と長崎。その惨状を見、衝撃を
受けた作曲家・山田耕筰は「長崎の
鐘」を歌劇

場所ですさんと冬のコンサートの打ち合わ
せをしていたとき、幻となった長詩「長崎
の鐘」に話が及び

か交響詩に
しようかと決

もう一つの「長崎の鐘」

ました。以来、構
想を温めていた辻

意します。しかし、白血病の永井博
士の他界と耕筰の病のため、ついに
世に出ることはありませんでした。

さんは、5月、完成した曲を携えてお見え
になりました。そのときのギターの響きが

戦後70年、ちょうど山田耕筰没後
50年の今年、日本を代表する11弦ギ
ターの作曲家、ギタリストの辻幹雄
さんが作曲し、未完の長編叙事詩

「長崎の鐘」の産声となったのです。今
後、この詩と音楽が多くの人々に響き伝わ
り心がつながり、永井博士が訴え続けた、
愛と人類平和の世界が築かれるように願っ
てやみません。戦後70年を平和元年、出発
の年にしたいものです。

「長崎の鐘」がよみがえります。

(松本市波田、古畑博子、66歳)

150行にわたる叙事詩「長崎の